韃靼海峡春景色

詩的想像力とその植民地的背景再考

稲賀繁美
国際日本文化研究センター研究員・総合研究大学院大学助教授

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた

安西冬衛のあまりに有名な一行詩。題して「春」は、西脇順三郎によってアンドレ・ブルトンの言う「神秘的驚嘆」の実現として、高く評価され、人口に膾炙してきた。だが安西が北川冬彦らと大連で創刊した詩誌「亜」の第19号（1926年5月）に掲載したときには、「てふてふが一匹間宮海峡を渡つて行つた」とあった。「間宮海峡」が「韃靼海峡」と書き換えられたのは、1929年、安西の第一詩集『軍艦茉莉』収録の折と知られる。間宮林蔵幕府隠密説（小谷野敦）以来、この海峡は、日本の領土確定さらには大陸進出と密接に絡まった境界だった。一匹の蝶がサハリンから大陸へと渡ることで、大陸に春が来る。とすればこの詩は、日本帝国主義による中国・朝鮮侵略を賛美する暗喩にほかならぬ。そんな決めつけも、不可能ではない。

唐突に思い出されるのが、インゲボルグ・バッハマンだ。パウル・ツェランの愛人でもあった詩人。彼女に戦後のベルリンを歌ったAsians Atmens ist jenseitsという一行が知られる。亜細亜の息吹きは彼方にある――というドイツ語の意味は、子音［s］の反復によって、音響的に裏切られる。［s］の律動が、意味の地平を食い破って、此岸へと越境してくる。それと同様、安西は［テフテフ］と［ダッタン］の「重層音のもたらす恍惚たるコレスポンデンス」に「魅了された」と告白する。ここでは［t／d］の共鳴が、海峡を越える渡りを、聴覚的に暗示する。

一匹の蝶の海峡横断。「韃靼」は、そのイメージを増幅するために選ばれた。そして、詩人の戦後の沈黙にもかかわらず、こうして選ばれた「韃靼」は、決して価値中立な語彙ではない。北京は清華大学の王中忱さんは、同時代の一例として、衛藤利夫の論文、「康熙帝と南懐仁」（1930年）に見える「韃靼」の用法に注目する。当時帝天図書館の館長だった衛藤は、満朝初期に、南懐仁にこと寄せてイエズス会師フェルビーストの綴った旅行記の現場、満洲に居合わせる幸福を口にする。この論文を含む『韃靼』が出版されるのは1938年。加藤新吉が序を寄せて、唐代に遡る古き名「韃靼」に、「日本を指導者とする東アジア民族の復興、明日の新しき歴史」を記す地名を見定める。衛藤と安西に面識があったか否か、詳らかにはしない。だが同時代の「大陸雄飛」の呼吸のなかで、安西の詩句が育まれたことは、徒に否定しても空しい。

「韃靼」を詩句に取り込むことと裏腹に、この時代以降、「韃靼人」呼ばわりに植民地被支配者蔑視の情念が込められていったことは否定できまい。だが、言葉狩りよろしく、この一行詩の「韃靼」を「間宮」に「是正」したところで、この詩を「帝国主義的底意」から救うことにはなるまい。それどころか禁語忌避は、犯罪の忌むべき出自を隠蔽するという証拠隠滅の犯罪に、かえって加担することになる。そしてもとより海峡の名称は、まやかしでしかない中立性を拒絶する。藝術の名において詩を時代から救うのでもなく、時代の名によって詩を弾劾し藝術から抹殺するのでもない。時代性のなかに詩の発生の秘密を探る語源学と、地名の恣意性を発掘する考古学と。それらが、詩をあるべき地勢へと呼び戻すことだろう。植民地研究のgéopoétiqueとgéopolitiqueとの重層に、反撃の契機もある。被支配者の武器たる侮蔑語への信頼はまた、平岡正明『韃靼人宣言』（1964）の温床となり、革命思想へと変奏される。

「海こえてこゆきちりくる夕べなど／こひしさの身に湧きまさるかな」（石上露子）

なお、エリス俊子「表象としての『亜細亜』」、モダニズム研究会『越境する想像力』（人文書院2002年）も参照。

「韃靼海峡春景色―詩的想像力とその植民地的背景再考」『図書新聞』2585号、2002年6月15日